

令和元年十月十日発行

皇學館論叢第五十二卷第五号

抜刷

拾遺和歌集・卷第十「神楽歌」の大嘗会和歌について

深  
津  
睦  
夫

皇學館論叢 第五十二卷第五号  
令和元年十月十日

## 拾遺和歌集・卷第十「神楽歌」の大嘗会和歌について

深 津 睦 夫

### □ 要 旨

拾遺和歌集の卷第十「神楽歌」には二十首の大嘗会和歌を収める。大嘗会和歌は、後撰集を除く歴代勅撰集のすべてに収められているが、拾遺集のそれは、冷泉・円融両天皇の大嘗会和歌のみを多数収めるという点で特徴的である。本稿は、歴代の大嘗会和歌を集成した『大嘗会悠紀主基詠歌』所載の両天皇時の和歌と、それを詠進した大中臣能宣・清原元輔・平兼盛の家集所収との関係を検討し、両天皇の大嘗会和歌が具体的にどのように詠進されたかを明らかにした上で、拾遺集がそれらをどのように採録したかを考察したものである。その結果、拾遺集所収の両天皇の大嘗会和歌は、大嘗会において実際に「楽」として奏されたものではなく、また、詠進者の家集から採録されたものでもなく、大嘗会催行の責任者の許に提出された三人の詠進歌すべての中から選ばれた歌であるとの結論を得た。

### □ キーワード

拾遺和歌集 大嘗会和歌 『大嘗会悠紀主基詠歌』 大中臣能宣 清原元輔 平兼盛

## はじめに

拾遺和歌集（以下「拾遺集」）の巻第十の巻名は「神楽歌」で、四十五首の歌を収めるが、そのうち宮中で行われる神事歌謡としての神楽歌と一致するのは巻頭の十一首だけである。残る三十四首は神詠歌、神社参詣の際の詠歌、屏風歌等であるが、中でも大嘗会和歌が二十首と多数を占めている。安和元年の第六三代冷泉天皇の際の十一首と、天禄元年の第六四代円融天皇の際の九首である。

大嘗会和歌は、最初の勅撰集である古今和歌集（以下「古今集」）以下、後撰和歌集を除く二十の勅撰集のすべてに入集している。古今集では巻第二十の「神遊びの歌」の一連の歌の最後に五首並べられている。後拾遺和歌集（以下「後拾遺集」）以後の各集では基本的に賀部に収められているが、千載・続古今・続千載の三集では、賀部と神祇部の両方に収められている。神祇部に入集しているのは、すべて大嘗会和歌のうちの「神楽歌」である。また、古今集と後拾遺集以後の勅撰集においては、複数の天皇のそれを時代順に配するのが通例で、それぞれの天皇時の歌数は一首か二首である。

これら歴代勅撰集と比べて、拾遺集の大嘗会和歌の入集の仕方はかなり特異である。巻第十の入集歌は、二代の天皇のそれに限定されており、しかも歌数がそれぞれ十一首と九首という多数に及んでいる。このほか、巻第五・賀にも一首入集している。<sup>(2)</sup>

大嘗会和歌の詠進は第五代仁明天皇時から始まるとされており、その形式は、何段階かをを経て、長和元年（一〇二二）の第六七代三条天皇の大嘗祭に至ってほぼ完成したと考えられている。<sup>(3)</sup>これ以後、形式は固定化するが、後拾遺集の

奏覧（応徳三年（二〇八六））は、その後のことである。一方、拾遺集の撰集（寛弘二〜四（一〇〇五〜〇七）頃か）は、形式の固定化以前のことであり、そのことが、拾遺集における大嘗会和歌の特異なあり方に関係するのではないかと思われる。

本稿では、まず冷泉・円融両天皇の大嘗会和歌が具体的にどのようなように詠進されたかを検討し、その上で、拾遺集撰者がそれをどのように採録したのかを考えたい。

## 一、大嘗会和歌について

周知のことであるが、論述の都合上、以下に大嘗会和歌について概要をまとめておく。<sup>(4)</sup>

大嘗会和歌とは、大嘗祭に行われる節会のために詠進された歌で、風俗歌と屏風歌とがある。大嘗祭は、十一月中の卯日に神事がおこなわれ、それに続いて、辰日と巳日に節会、午日に豊明節会がおこなわれる。神事と節会では、悠紀・主基の国の貢ぎ物が献じられ、宴があり、歌謡が奏されるが、その歌謡が風俗歌である。また、節会の場には悠紀・主基の国にちなんだ絵の描かれた屏風が設置されるが、その屏風に貼られる歌が屏風歌である。

形式が整った平安時代中期以降は、悠紀方・主基方それぞれ風俗歌十首、屏風歌十八首の二十八首が、各一名の歌人によって詠進された。その二十八首は、次のような構成になっている。

風俗歌十首Ⅱ 稻舂歌、神樂歌、辰日風俗歌（参入音声・樂破・樂急・退出音声）、巳日風俗歌（参入音声・樂破・樂急・

退出音声）各一首。

屏風歌十八首Ⅱ 甲・乙・丙・丁・戊・己帖各三首。

拾遺和歌集・卷第十「神樂歌」の大嘗会和歌について（深津）

風俗歌のうち、稲春歌は、大嘗祭の第一日卯日の儀において、天皇が大嘗宮に入る際に、悠紀・主基国から献上された稲を舂きながら奏される。神楽歌は、巳日の夜におこなわれる清暑堂御神楽において奏される。風俗歌は、辰日・巳日に、悠紀・主基国からさまざまな物が献上される際に奏される。

右の風俗歌・屏風歌二十八首というのは、当初からそのような形式であつたわけではなく、時代を経て徐々に整えられたものであり、その歴史の大筋は藤田百合子によって明らかにされている。<sup>(5)</sup>藤田は主として『大嘗会悠紀主基詠歌』(書陵部蔵)<sup>(6)</sup>を用いてこの問題を論じているのであるが、本稿においても、以下、同書を検討対象とするので、ここで、その内容を簡単に述べておく。

『大嘗会悠紀主基詠歌』は、歴代の大嘗会和歌の集成書である。第一部「撰集拔書」、第二部「大嘗会和歌作者例」、第三部「和歌」から成り、第三部「和歌」に、第五四代仁明天皇から第一一六代桃園天皇までの三十二度の大嘗会和歌が収録されている。高倉天皇を「当今」と記し、その後に再び後堀河天皇も「当今」と記し、さらに室町時代の後花園天皇、江戸時代の桜町・桃園天皇の分まで収録しているので、数次の書き継ぎによって成つたと考えられる。歌の書き方もまちまちで、これは原資料の形態を残したものである可能性が高い。

『大嘗会悠紀主基詠歌』(以下「詠歌」)の記事は、三条天皇以前のそれと三条天皇以後のそれとで様相を異にする。三条天皇以前の記事を簡潔に整理すると、次のようになる。仁明・醍醐天皇時の題詞は「風俗」とあるのみ。朱雀天皇時は「稲春歌」とあるのみ。しかし、村上天皇時には「風俗神歌」「稲春歌」「参入音声」「楽破」「楽急」「退出音声」等、後の三条天皇以降の組織の要素がだいたい出揃っている。冷泉天皇の時もほぼこれに近い形である。ただし、冷泉天皇のそれは悠紀方だけで二十四首もの歌がある。円融天皇の場合は「神歌」や「参入音声」等の題詞がなく、歌数は悠紀方十六首、主基方五首である。花山天皇については記事そのものがない。一条天皇の場合は題詞が記されて

おらず、歌数は悠紀方七首となっている。また、詠進歌人の人数が、冷泉・円融の場合は悠紀方だけで三名、花山天皇の時は二名、一条天皇以下は一名と、代によって異なっている。このように、一条天皇までは、形式も整っておらず、歌数も不揃いである。それが、三条天皇に至って、風俗歌十首、屏風歌十八首が揃い、以後は、ほぼ同形式で継続している。

藤田は、この記事について、資料的に信頼できない部分もあるが、独自の所伝に依るところが多く、形式・歌数の不安定さは、風俗歌の歴史的発展の過程を示したものであるとして、それに基づいて、大嘗会和歌の歴史を次のように整理している。

(1) 純粹な悠紀主基兩齋国の風俗歌（在地の歌謠）時代

(2) 風俗歌の新作時代（仁明天皇以後）

(3) 屏風歌付加整備時代（三条天皇以後）

また、風俗歌が新作されるようになった仁明天皇時のそれは、現在知られるかぎりでは一首のみであり、幾代かを経て、定型の十首形式に至っているのであるが、その定型の成立時期は村上天皇時と見ている。

藤田のこの見方、特に三段階の展開というところえ方は広く認められているが、定型の成立時期については、三条天皇時まで引き下げる見方もある。<sup>(8)</sup>これは、『詠歌』の記事は風俗歌の歴史的発展の過程を反映しているという藤田の考えを冷泉・一条天皇の時代にも当てはめて、その間の形式・歌数が多様であるのを、いまだ詠進形式が定まっていなかったことの反映と見ての説である。

このような見方に立てば、本稿で問題としている冷泉・円融両天皇の大嘗会和歌は、十首の定型とは異なる形式で詠進されたことになる。しかし、はたしてそうなのか。村上天皇時に一度は定型とほぼ同じ形式が成立していること

は無視できないのではなからうか。従来は、『詠歌』の記事が、実際に詠進された歌のあり方をそのまま反映していることを前提として考えられるばかりで、個々の記事の内容が検討されることはなかった。本稿では、改めて『詠歌』の記事を詳細に検討して、両天皇時に詠進された大嘗会和歌がどのようなものであったかを考えたいと思う。

## 二、元輔・兼盛・能宣の家集

『詠歌』の記事の検討に入る前に、歌の詠進者について述べておく。

三条天皇以降の大嘗会和歌と冷泉・円融両天皇のそれとの大きな違いの一つに、詠進者の数がある。三条天皇以降は悠紀・主基方それぞれ一名の歌人が詠進しているのに対して、冷泉・円融天皇の際は、悠紀方だけで三名の歌人が詠進している。<sup>(9)</sup>冷泉天皇時の詠進者は、清原元輔・平兼盛・大中臣能宣、円融天皇のそれは、大中臣能宣・平兼盛・中務である。

幸いなことに、冷泉天皇の際の歌人三名については、その家集に大嘗会和歌が収められており、円融天皇時については、三人のうちの能宣だけであるが、やはり家集に大嘗会和歌が収められている。これらは、拾遺集や『詠歌』の撰集資料の問題を考察する上で重要な手がかりとなる。

以下、三名の家集について順番に述べる。<sup>(10)</sup>

まず元輔集について。伝本は二類五種に分類されるが、大嘗会和歌が収められているのは、第二類の尊経閣文庫本（『新編私家集大成』Ⅲ）だけである。一七九番の詞書に「れいせん院の御ときのだい上ゑのうた」とあって、「いくちたひきみかみよにはあふみなるいほひのかはのすまむとすらむ」以下、一八七番まで九首が存する。それに続く一八八

番歌は「いくちたひきみかみよにははりまなるたまつくりかはすまむとすらむ」「はりま」をミセケチにして「あふみ」と傍書する」という歌であるが、一見して明らかなように、一七九番歌とそつくりで、国名の「あふみ」を「はりま」に、川名の「いはひのかはの」を「たまつくりかは」に改めただけである。これに続く二首は「いやたかのみね」（一八九）「なかひこのやま」（一九〇）を詠んでいるが、これらの山の所在地は播磨国である。冷泉天皇時の悠紀国は近江、主基国は播磨であるから、一八八―一九〇の三首は、その時の主基の詠進歌であつたと推定される。すなわち、元輔は、悠紀の歌人であるとともに、主基の歌人でもあつたのである。一七九番歌と一八八番歌は、国名・地名だけを差し替えて悠紀歌と主基歌とされているが、これは、大嘗会和歌のような儀式歌の詠じ方を示唆しており、興味深い。表現の独自性というようなことは必要なかったのであろう。なお、元輔集（Ⅲ類）の末尾には、「よにわるきはんなり」とあり、書写者が本文に問題のあることを認識していたことが知られる。この点は留意しておきたい。

次に兼盛集。伝本は、正保版歌仙家集本系（Ⅰ）、西本願寺蔵三十六人集本系（Ⅱ）、冷泉家時雨亭文庫蔵本（Ⅲ）の三系統に分類されるが、いずれの系統の本にも大嘗会和歌が収められている。それぞれ小異があり、Ⅰ類本は十一首、Ⅱ類本は十首、Ⅲ類本は九首を収める。Ⅰ類本は、まず「大嘗会歌」と記して、次に「せたのはし」という題詞を置いて、「ひつきものたえすそなふるあつまちのせたのなかはし音もと、ろに」（二〇五）という歌を記すが、それ以後は題詞を置かず、「万代をもちそさかえん近江なるおもの、はまのあまのひつきは」（二〇六）以下一五番まで十首を配する。Ⅱ類本は、「いつれのみかとの御ときにかあらむ、たいさうゑの歌」と題して、「よろつよをもちそさかえむあふみなるおもの、はまのあまのひつきは」（二）以下一〇番までの十首を配する。すなわち、Ⅰ類本の一〇五番歌欠く。Ⅲ類本は、「いつれのみかとの御ときにか」と題して、九首を配し（二〇九）、Ⅰ類本の一〇五番歌と「か、みやま山ひこたかくよはふなり世のさかゆへきかけそみゆらん」（Ⅰ類本一二・Ⅱ類本七）を欠く。



能宣集には注意が必要である。伝本は、西本願寺本三十六人集系（Ⅰ）、正保版歌仙家集本系（Ⅱ）と、書陵部蔵三十六人集所収本（Ⅲ）の三系統に分類されるが、大嘗会和歌が収められているのは、Ⅰ類本とⅢ類本である。Ⅰ類本は、その序文から、能宣自撰の花山天皇への献上本であることが知られる。Ⅲ類本は、その序や円融朝の天元三年（九八〇）までの歌を収めていることから、円融天皇への自撰の献上本であると考えられている。この二系統の本における大嘗会和歌の所収状況には大きな相違があるので、詳しく検討しておきたい。

まずⅠ類本には、「冷泉院の御時大嘗会の悠紀の歌」と詞書があり、「きみかみよなからのやまのかひありとのとききくものゐるときぞみる」（二四五）から、「ときはなるおほくらやまのみねよりもくにのみつきはつみをますへき」（二六〇）まで十六首を並べる。いずれの歌にも「なから山」「おほくら山」等の地名を題詞として記す。次に、「おなし大嘗会の悠紀の歌」との詞書があり、「さ、れいしの山」と「千とせのやま」を題詞とする二首（二六一・二六二）を並べる。

一方、Ⅲ類本では、「大嘗会のゆきのうた、ゝてまつれとはへりしに、なからのやま」という詞書を有する「きみかよをなからの山のかひありとのときく、ものゐるときぞみる」（二三三）を第一首目とし、以下、「あさ日のさと」を題詞とする「てりわたるあさ日のさとをみわたせはくるへくもあらぬきみかみよ哉」（二四二）まで、十首を並べる。続いて、「のちのとしの、ゆきのかたにたてまつる、おなし」と記して、「うらくゝといまさしのほるひさかたのあさ日のかけにみるかたのしさ」（二四三）から「おほくら山」を題詞とする「ときはなるおほくらやまのみねよりもくにのみつきはつみをますへき」（二五二）まで、やはり十首を並べる。さらに、「□すのかた、たはのくに」との記事があつて、「さ、れいしの山」を題詞とする二首（二五三・二五四）と「ちとせの山」を題詞とする一首（二五五）を載せる。

両者を比較すると、「なからの山」を題とする一首目から「あさ日のさと」を題とする十首目まではほぼ同じである（五首目と六首目が入れ替わっているという違いがある）。大きな違いは、Ⅲ類本では、十首目の次に「のちのとしの、ゆきのかたにたてまつる」と記していることである。一方、Ⅰ類本にはそれがない。該当箇所をそれぞれ引用する。

### 【Ⅰ類本】

あさ日のさと

てりのほるあさひのさとをみわたせはつくへくもあらぬ君かみよかな（一五四）

やすかは

やすかはのせゝにむれゐるあしたつはいくそちとせのよはひなるらむ（一五五）

### 【Ⅲ類本】

あさ日のさと

てりわたるあさ日のさとをみわたせはくるへくもあらぬきみかみよ哉（二四二）

のちのとしの、ゆきのかたにたてまつる、おなし

うらくゝいまさしのほるひさかたの あさ日のかけにみるかたのしき（二四三）

やすかは

やすかはのせゝにむれゐるあしたつは いくそちとせのためしなるらむ（二四四）

つまり、Ⅲ類本では、十一首目の二四三番歌から二五二番歌までは、それ以前の十首とは別の大賞会のために詠進した十首であることを明記しているのである。言うまでもなく、二二三～二四二番歌は冷泉天皇の、二四三～二五二番歌は円融院の大賞会和歌である。それに対して、Ⅰ類本の場合、「のちのとしの」という記事がないから、一首目

の一四五番歌から一六〇番歌までのすべてが冷泉天皇時の悠紀の歌としか見えない。また、Ⅰ類本の場合、Ⅲ類本の二四三・二四六・二四七・二四九にあたる歌がなく、全部で十六首となっている。

もう一点注目しておかなければならないのは、Ⅰ類本ならば一六一番歌の、Ⅲ類本ならば二五二番歌の詞書である。Ⅰ類本の「おなし大嘗会の悠紀の歌」というのは、それまでが悠紀の歌のはずであるから、不自然である。一方、Ⅲ類本の「すのかた、たはのくに」というのは「主基方、丹波国」の意と考えられるが、円融天皇時の主基国は丹波であるから、この記事はそれに合致する。すなわち、能宣は主基方の歌をも詠んだことになる。ただし、「さ、れいしの山」の題詞の下に二首の歌があるのは不審。『詠歌』には二五三番歌が円融院の主基の歌として載るから、二五四番歌は別の機会の大嘗会和歌である可能性もある。花山天皇時の主基国は丹波だから、その際の歌かもしれない。

以上見てきたように、三名の歌人は、いずれも十首前後を詠進している。各自が詠んだ地名をまとめると、次のようになる。

元輔Ⅱ 五百井川・長等・鏡山・御物浜・勢多橋・安河・宮浜・三上山△・朝妻山

兼盛Ⅱ 勢多橋・御物浜・祝○・長等山・大国郷(Ⅱ類、Ⅰ・Ⅲ類「おはあらきの郷」)・安河・鏡山・鏡山・岩蔵山・とみゆか・朝妻山

能宣Ⅱ 長等山・松ヶ崎・大倉山・安河・三上山△・五百井川・鏡山・岩蔵山・玉蔭井・朝日里

一見して明らかなように、重複している地名は多いが、すべて同一の地名を詠んでいるわけではない。

このうち、○印を付したのは稻舂歌で、△印を付したのは神歌と考えられる歌である。稻舂歌は、『貞観儀式』によれば、毎回新たに作成されており、事実、朱雀天皇の大嘗祭の時にも新作されたことが、『詠歌』によって知られる。「いね」あるいは「つく」という表現が必ず含まれるのが特徴で、三名の家集を見ると、兼盛集には「いはひみつか

はせきあけてうゑし田のいねは万代たえてたえにし」(Ⅲ類本二、I・Ⅱ類本は初句「いはのうへに」)がある。元輔集にはそれがないが、後述するように、『詠歌』の冷泉天皇時の悠紀方の「稻春歌」は元輔の作とされており、なんらかの事情で家集には収められていないが、実際には詠進したと見られる。神歌は、神楽の採物を詠むのが一般で、「桺」を詠む例が多い。能宣集では、「ちはやふるみかみのやまのさかきは、さかへそまんすゑのよまてに」(Ⅲ類本二三七)、元輔集には「よろつよのいろもかはらぬさかきは、みかみのやまにおふるなりけり」(Ⅲ類本一八六)がある。

三名の歌人は、冷泉天皇の大嘗会に際して、悠紀国近江の地名を詠んだ歌を各々十首前後詠進した。地名の選択は各歌人に任せられていた。ただし、稻春歌や神歌をその中に含むことは、必須ではないにしろ、大体当初から定まっていたらしい。歌人たちは、それらの歌を詠進するとともに、自分の手元にも書き残して、後に家集にまとめたと考えられる。また、詠進した歌のすべてが残っているわけではないが、元輔と能宣は主基方の歌も詠んだことが知られる。以上の家集のあり方をふまえて、次に『詠歌』の内容を検討する。

### 三、冷泉天皇時の大嘗会和歌

『詠歌』の冷泉天皇の分から検討する。収められている歌は二十四首に上るので、和歌本文は省略し、詞書・作者表記・他出文献をまとめて示す。

冷泉院 安和元年十一月 日

悠紀風俗 十首 近江国

一六二 稻春歌 野洲郡 元輔 民部丞清原 「他出なし」

拾遺和歌集・卷第十「神楽歌」の大嘗会和歌について(深津)

- 一六三 神歌 三上山 能宣 神祇少副大中臣 [能宣集Ⅰ・Ⅲ]
- 一六四 参入音声歌 打出浜 兼盛 [他出なし]
- 一六五 楽破歌 鏡山 同 [兼盛集Ⅰ・Ⅱ]
- 一六六 楽急歌 三尾山 元輔 [他出なし]
- 一六七 退出音声歌 安川 兼盛 [能宣集Ⅰ・Ⅲ]
- 一六八
- 一六九 後日参入音声 長等山 兼盛 有家集 [兼盛集Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ]
- 一七〇
- 一七一 〔後朱雀・主基・屏風歌丙帖「初秋」、義忠〕
- 一七二 〔後朱雀・主基・屏風歌甲帖「暮春」、義忠〕
- 一七二 〔後朱雀・主基・屏風歌甲帖「仲春」、義忠〕
- 一七三 楽破 石倉山 [能宣集Ⅰ・Ⅲ]
- 一七四 あさつまのみね [兼盛集Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ]
- 一七五 岩くら山 [兼盛集Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ]
- 一七六 [兼盛集Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ]
- 一七七 楽破 松崎 [能宣集Ⅰ・Ⅲ]
- 一七八
- 一七九 [兼盛集Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ]
- 一八〇 退出音声 玉蔭井 [他出なし]

一八一 〔兼盛集Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ〕

一八二 せたのはし 〔兼盛集Ⅰ〕

一八三 おものゝはま 〔兼盛集Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ〕

一八四 いはしゐ 〔兼盛集Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ〕

一八五 〔兼盛集Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ〕

以上十五首 正成歌歌

此歌七首在能宣集 余入風俗之外也

一八六 主基

他資料を参照すると、明らかに冷泉天皇時の大嘗会和歌ではない例が見つかる。一六八・一七〇・一七一・一七二の四首で、いずれも正しくは後朱雀天皇時の主基方の屏風歌（三五六・三五七・三四四・三四三）である。これらは、後人が誤って補入するなどしたものと推定される。本来は、一六七「退出音声歌 安川 兼盛」、一六九「後日参入音声 長等山 兼盛」、一七三「楽破 石倉山」と続いていたところに、一六七の次に一首、一六九の次に三首補入されているのである。

そうだとすると、一七三以後についても同様の可能性が考えられる。すなわち、本来は一七三「楽破 石倉山」、一七七「楽破 松崎」、一八〇「退出音声 玉蔭井」と続いていたところに、一七四〜一七六、一七八〜一七九、一八一〜一八五が補入されたのではないかと疑われるのである。そのことは、一六九と一八五の重複ということによって裏付けられる。一六九は次のようにある。

後日参入音声 長等山 兼盛

楽浪やなからの山のなからへて久しかるへき君が御代かな

一方、一八五には詞書がなく、次のようにある。

さ、なみのなからの山のなからへてたのしかるへき君か御代かな

部分的な表現の相違はあるが、この二首は同じ歌と見てまちがいあるまい。この重複現象は、一八五が補入されたものであることを示している。一八五を含めて、一七四以下の補入の可能性がある歌は、いずれも兼盛の家集（I類本）にも収められている。<sup>(12)</sup>これら十首はすべて、兼盛集から補入されたものと見られる。

本来『詠歌』に冷泉天皇時の悠紀方の歌として載せられていたのは、前記の十四首を除いた十首だけであつたと考えられる。これは、最初の見出し「悠紀風俗 十首 近江国」とも合致する。ここに改めて本来の形の題詞と作者名を掲出し、併せて、三名の詠進者の家集との関係を注記する。

一六二 稲春歌 野洲郡 元輔 民部丞清原（家集なし）

一六三 神歌 三上山 能宣 神祇少副大中臣（能宣集）

一六四 参入音声歌 打出浜 兼盛（家集なし）

一六五 楽破歌 鏡山 同（兼盛集）

一六六 楽急歌 三尾山 元輔（家集なし）

一六七 退出音声歌 安川 兼盛（能宣集）

一六九 後日参入音声 長等山 兼盛（兼盛集）

一七三 楽破 石倉山（能宣集）

一七七 楽破 松崎（能宣集）

一八〇 退出音声 玉蔭井（家集なし）

「稻舂歌」「神歌」「参入音声」「楽破」「楽急」「退出音声」という題詞は、前代の村上天皇や後の三条天皇のそれとほぼ一致する（「楽破 松崎」は「楽急」の誤りか）。村上天皇の時に始まった十首の組織は、冷泉天皇の時にそのまま継承されているのである。村上天皇や三条天皇の例に比して歌数が二倍を超えており、一見、冷泉時は異なる組織のようであるが、それは、後人が別の歌を補入したためだったのである。

この十首の作者表記と、これらを詠進したはずの三名の家集を比較すると、不審な点が多い。一六三能宣、一六五兼盛、一六九兼盛の三例は、作者名のとおりにならずにその家集に歌が入集している。ところが、一六二元輔、一六四兼盛、一六六元輔の場合は、その歌がそれぞれの家集に見えない。一六七兼盛に至っては、能宣集にその歌が入っている。一七三・一七七・一八〇の三首には作者表記がない。勅撰集などの場合は、作者表記がない時はその前の最後に記された作者表記が続いていることになるが、一六四「兼盛」に続いて一六五「同」と表記されている例が存するので、この場合は、勅撰集と同じように考えることはできない。この三首については作者表記がなされていないと解するべきであろう。このうち、一七三・一七七の二首は能宣集に見え、一八〇は他の資料のどこにもない。なぜこのようなことになっているのであろうか。

これらのうち、別人の家集に入集している一六七と、作者表記のない一七三・一七七・一八〇の四例については、大嘗会和歌の詠進の仕方を考えることによって説明が可能であるように思われる。作者名がまちがっていたり、作者表記がなされていないなかったりしているのは、『詠歌』編纂の時点で、それが誰の歌か分からなかったことを意味しているのではないかと考えるのである。そのような状況は、冷泉天皇時の詠進の仕方を見ると、十分にあり得ることと思われる。



形式が固定した後の大嘗会和歌の制作過程については、院政期の『袋草紙』によつて知ることが出来る。今問題としている冷泉天皇の大嘗会からは二百年近く時代が下つてのものであるが、十首の組織等は変わっていないので、これは参考とするに足ると思われる。同書の「大嘗会の歌の次第」には次のようにある。<sup>(13)</sup>

先づ国より所々の名を行事に注進し、もつて作者の許に下す。作者は便宜の所々を撰びおのの禁忌を避くべし、これを諷詠し、行事所の弁にたてまつる。風俗歌をもつて樂所に下す。これをもつて人々樂を作る。(略)

宮内少輔伊行云はく、「件の歌先づ清書所に下されて、また三通を書き弁の許に送る。一通は一紙に稻春歌と神樂の両首を書く。一枚に風俗歌八首を書く。一通は二枚に屏風歌十八首を書く。ならびに稻春歌を下に下し、風俗は樂所に下し、屏風は絵所に下す」と。

これによれば、次のように作成された。まず齋国から地名が注進され、作者はそこから良い地名を選び、歌を詠作して、清書所に提出する。清書所では、稻春歌と神樂歌を書いた一通、風俗歌八首を書いた一通、屏風歌十八首を書いた一通が作成され、大嘗祭の行事(責任者)に送られる。行事は、稻春歌・神樂歌を書いた一通は「下」に下し、風俗歌は樂所に下し、屏風歌は絵所に下す。樂所に下された八首は、そこで樂が新作された。稻春歌・神樂歌がどのような扱われたか詳細は記されていないが、歌詞のみが新作され、樂は従来のものが用いられたと推測される。

以上は、作者が悠紀・主基各一人になつてからの次第である。これを参考にして、三人で詠進した場合の次第を考えてみる。

まず各家集によれば、それぞれが齋国の中から良い地名を選び、十首程度を詠作している。次に、三者は、それらを行事に提出したと考えられる。<sup>(14)</sup>あるいは、清書所に送るという一段階を踏んでいるかもしれないが、いずれにしろ、それぞれから各十首程度、合計約三十首が行事に提出されたはずである。この後、風俗歌八首は樂を新作するた

めに楽所に送られ、稻春歌と神歌<sup>15</sup>は別の所に送られることになるから、この段階で、三十首の中から十首が選ばれたと考えられる。この十首の選定に行事所の弁が直接関与したのか、あるいは誰かに指示を仰いだのかは不明。選ばれた八首と二首はそれぞれ紙に記されたと推測されるが、問題は、この時、選ばれた一首一首に作者名が記されていたかどうかである。最終的には大賞会の儀式の中で歌謡として奏されることを考えると、楽所等に送られる歌に作者名が記されていた可能性はあまり高くないのではなからうか。

『詠歌』をまとめる時に編者の手元にあった資料を想定すると、「稻春歌」「神歌」「参入音声」等が記されていることから、行事の所で歌が選定されて以後のものであることはまちがいない。したがって、それには作者名は記されていないかった可能性が高い。作者名が不正確であったり、欠落したりしていることの理由は、そのように考えることによって、はじめて理解できると思うのである。一部に正しい作者名があるのは、編者が後に調べたというような事情が推測される。

一方、家集にない歌については、そのようになっていく具体的な事情はわからない。また、前述のとおり、編者の手元にあった資料に作者名が記されていなかったとすれば、この三首についても、その表記が正しいのかどうかもわからない。ただし、題詞の記事から見ても、これらが詠進された歌であることを疑う必要はなからう。元輔の二首が元輔集に見えないのは、前節で指摘したように、元輔集は本文的に問題がある可能性があり、それが原因かもしれない。一六二番歌は稻春歌であるが、兼盛の稻春歌がその家集に存するのに対して、元輔集には見えない。前述のように、稻春歌は当初から詠進することが定められていた可能性が高く、そのことを考慮すると、家集にそれが見えないのは、実際には詠進したが、何らかの事情で家集に洩れたということであったかと思われる。一六六元輔詠や一六四兼盛詠についても、実際には詠進したが、たまたま家集には洩れた可能性があろう。たとえば、一度十首を詠進した

が、後に詠進の追加を求められ、追加分は家集に収められなかったというような事情が想定されようか。

以上のように、『詠歌』の冷泉天皇分は、三名の歌人が詠進した約三十首の中から行事が選んだ「稻春歌」以下の十首が本来の形で、それに後人が別の大嘗会の際の歌や兼盛集所収歌を十四首補入したものと見られる。

#### 四、円融天皇時の大嘗会和歌

次に円融天皇の分を検討する。収められている歌は二十一首に上るので、これも、和歌本文は省略し、詞書・作者表記・他出文献をまとめて示す。

円融院 天禄元年十一月廿日

悠紀

能宣

一八七 稻春歌 吉田郷 [能宣集Ⅰ・Ⅲ]

一八八 三上山 [能宣集Ⅰ・Ⅲ]

一八九 長等山 [能宣集Ⅰ・Ⅲ冷]

一九〇 朝日郷 [能宣集Ⅲ]

一九一 安河 [能宣集Ⅰ・Ⅲ]

一九二 鏡山 [能宣集Ⅲ]

一九三 大蔵山 [能宣集Ⅰ・Ⅲ冷]

一九四 石倉山 [能宣集Ⅲ]

一九五 松崎 「能宣集Ⅲ」

一九六 泉川 「能宣集Ⅰ・Ⅲ」

一九七 いほ井かは 「能宣集Ⅰ・Ⅲ冷」

一九八 長沢池 「能宣集Ⅰ・Ⅲ」

一九九 大蔵山 此山以前在之可尋 「能宣集Ⅰ・Ⅲ」

二〇〇 鏡山 「能宣集Ⅰ・Ⅲ冷」

二〇一 あさ日のさと 「能宣集Ⅰ・Ⅲ冷」

二〇二 玉かけのさは<sup>は敷</sup> 家集郷也 「能宣集Ⅰ・Ⅲ冷」

円融院

主基 丹波 能宣代人

二〇三 さ、れ石の山 「能宣集Ⅰ・Ⅲ」

二〇四 千とせ山 「能宣集Ⅰ・Ⅲ」

（左注：此歌拾遺には天曆元年大嘗会能宣／ことしより千年の山は声たえず君が御代をぞ祈るべらなる／能宣家集に

は冷泉院云云、但冷泉院主基は丹波也、此集失歟）

大嘗会 主基

二〇五 明石浜 「重之集」

主基方 丹波国

二〇六 桑原郷 「重之集」

拾遺和歌集・卷第十「神楽歌」の大嘗会和歌について（深津）

右のうち、二〇三番以下の五首は主基の歌で、今は触れない。<sup>(16)</sup> 悠紀の歌として並べられている十六首を問題とする。これら十六首は、実際の大嘗会において歌謡として用いられた歌とは考えにくい。そのように判断するのは、「稻舂歌 吉田郷」という題詞のある一首目を除いて、二首目以降には「神歌」「参入音声」等の題詞がなく、記されているのは地名だけだからである。もし実際の大嘗会で用いられたのであるならば、冷泉天皇のそのように、「神歌」以下の題詞も記されて然るべきであろう。一首目「名にたてるよしだのさとのいねなればつくともつきじ千代の秋まで」については、「いね」「つく」という語を含んでおり、一見して「稻舂歌」であることが明白であるから、『詠歌』の編者が補記することは可能だったのではなからうか。

ここに収められている歌は、おそらくすべて能宣の家集から採られたものと推定される。注記を一見すれば明らかのように、すべての歌が能宣集のⅠ類本やⅢ類本の所収歌と一致する。ただし、資料源となった家集は、現存の能宣集のいずれとも異なるものであったと思われる。

前述のとおり、能宣集は三系統に分類され、大嘗会和歌はそのうちのⅠ類本とⅢ類本に収められているが、両系統において二つの重要な相異点がある。一つは、Ⅲ類本が冷泉天皇時と円融天皇時の歌を区別して載せているのに対して、Ⅰ類本は十六首すべてがあたかも同一の大嘗会和歌のように並べられている点である。もう一つは、Ⅲ類本には冷泉天皇の十首と円融天皇の十首の計二十首が収められているのに対して、Ⅰ類本では、まとめて十六首しか収められていない点である。

一八九・一九三・一九七・二〇〇・二〇一・二〇二の六首に「能宣集Ⅰ・Ⅲ冷」と注記したが、これは、Ⅲ類本には冷泉天皇時の歌として載り、Ⅰ類本には十六首一連の中の歌として載っていることを示したものである。このよう

に冷泉天皇時の大嘗会和歌が円融天皇のそれとして採られているのであるから、その元となったのは、Ⅰ類本のよう  
に、二つの大嘗会和歌が区別されていない形態の本であったと見てよからう。一方、一九〇・一九二・一九四・一九五  
の四首に「能宣集Ⅲ」と注記したが、これは、Ⅰ類本には見えず、Ⅲ類本にのみ見られることを示したものである。  
このことは、これら四首が現存のⅠ類本から採られたのではないこと、すなわち、Ⅲ類本と同じように、円融天皇時  
の和歌が十首揃った本から採られたことを意味しているが、十首目の次に「のちのとしの、ゆきのかたにたてまつる」との記事を  
本と同じ歌数すなわち二十首を収めているが、十首目の次に「のちのとしの、ゆきのかたにたてまつる」との記事を  
持たない形態の本であったと推定される。

このように、編者の拠った家集は二十首を収めた本と推定されるのであるが、ここに採られているのは十六首であ  
る。では、採られていない四首というのはどのような歌か。現存本のⅢ類本で示すならば、次のとおりである。

まつかさき

ちとせふるまつかさきにはむれあつゝつるさへあそふ心あるらし（二三四）

やすかは

やすかはのかはへにあそふあしたつはちとせのかけをならへてそみる（二三六）

みかみのやま

ちはやふるみかみのやまのさかきはゝさかへそまんすゑのよまてに（二三七）

いはくらやま

うこきなさいはくらやまによろつよをはこひおきつゝちよをこそつめ（二四〇）

この四首は、すべて『詠歌』の冷泉天皇分に収められている。また、同書の冷泉天皇分に、この四首以外に能宣の

歌はない。つまり、資料源となった家集に収められていた二十首の中から、『詠歌』において冷泉天皇時の歌として入集している分を省いたのが、この円融天皇時の大嘗会和歌として収められているものである。能宣集のⅠ類本には大嘗会和歌の最初に「冷泉院の御時大嘗会の悠紀の歌」と、何時の歌かを明示しているが、Ⅲ類本には「大嘗会の悠紀の歌たてまつれとはべりしに」「後の年の悠紀の方にたてまつる」とあるのみで、何時の大嘗会のそれかは明記していない。『詠歌』において資料源とされた家集も、Ⅲ類本と同様に、何時の大嘗会の歌であるかを明記していないものだったと思われる。同書の編者は、そのような形態の家集において四首がすでに冷泉天皇の記事に収められているのを見て、それらを除く十六首を円融天皇時の分であると判断したのであろう。

以上見てきたように、円融天皇時の大嘗会の悠紀方の歌として収められているのは、すべて能宣の家集から採ったものである。ただし、冷泉天皇の際の大嘗会和歌であることが明らかな四首は除かれている。

『詠歌』のこの円融天皇の記事は、大嘗祭に際して詠進された歌の実態をそのまま反映してはいない。冷泉天皇時の歌を六首も載せている点一つをとってみても、それは明らかである。実際の大嘗祭において複数の作者が歌を詠進したことは、拾遺集に能宣・兼盛・中務の大嘗会和歌が収められていることから見て、間違いはない。それにもかかわらず、ここに能宣集所収の歌しか納められていないのは、編者が入手できたのがそれだけだったからだと考えるべきであろう。したがって、『詠歌』の記事を根拠に、円融天皇時には「稻春歌」「神歌」等の組織立った十首が制作されなかったとは言えない。むしろ、冷泉・円融両天皇の悠紀方の風俗歌を詠進した能宣の家集を見ると、二つの詠進歌の間に形式に違いはないから、複数の作者がそれぞれ十首程度詠進して、そこから「稻春歌」以下が選抜されるという冷泉天皇時の制作方法が踏襲された可能性が高い。

円融天皇の大嘗会和歌が本来の形で残らなかったのは、詠進者が複数であったことに原因があるように思われる。

三条天皇以降は、詠進者は悠紀・主基各一名と定まる。前記『袋草紙』によれば、詠者は稻舂歌・神樂歌（神歌）を一紙に、風俗歌八首を一紙に記して、大嘗祭の責任者に提出するとあるが、この場合提出されるのは、悠紀・主基各一名分であるから、それはそのまま残る可能性が高い。また、詠進された歌は、そのまま行事の許から楽所などに渡される。楽が作られ、奏される場合、その作者名は示されないとしても、その作者は一人なのだから、自ずと誰であるかは明らかである。ところが、複数の作者が詠進する場合は、各作者の歌がいったん責任者の許に集められ、責任者が選歌して、それを楽所等に渡すことになる。この段階で、詠進した歌はばらばらにされることになるから、散逸しやすいのではなからうか。また、楽が作られ、歌謡として奏される段階になると、作者名が示されるとは考えにくく、これ以後誰の作か分からなくなること多かつたと思われる。

## 五、拾遺和歌集の大嘗会和歌

以上、『詠歌』の冷泉・円融天皇の記事内容を検討して、両天皇の大嘗会和歌が実際にどのように詠進されたのか、そして、それがどのように同書に収められたのかを考えてきた。これをふまえて、拾遺集の大嘗会和歌について考えたい。

まず詞書・作者表記ならびに他出文献との関係を検討する。論点を見やすくするために、和歌本文は省略し、定家本を底本とする新日本古典文学大系本に拠って、詞書・作者表記・他出文献をまとめて示す。

五九八 安和元年大嘗会風俗、長等山 大中臣能宣 「能宣集Ⅲ」

五九九 「兼盛集、『詠歌』「後日参入音声 兼盛」



- 六〇〇 岩蔵山 よみ人しらず 「能宣集Ⅲ」、「詠歌」「楽破」
- 六〇一 三上の山 能宣 「能宣集Ⅲ」、「詠歌」「神歌 能宣」
- 六〇二 よみ人しらず 「元輔集」
- 六〇三 元輔 「元輔集」
- 六〇四 大蔵山 能宣 「能宣集Ⅲ」
- 六〇五 水尾山 よみ人しらず 「『詠歌』」「楽急 元輔」
- 六〇六 鏡山 能宣 「能宣集Ⅲ」
- 六〇七 松が崎 清原元輔 「能宣集Ⅲ」、「詠歌」「楽破」
- 六〇八 おものの浜 兼盛 「元輔集」
- 六〇九 天禄元年大嘗会風俗、千世能山 能宣 「能宣集Ⅲ」
- 六一〇 弥高山 兼盛
- 六一一 三上山 能宣 「能宣集Ⅲ」
- 六一二 岩蔵山 「能宣集Ⅲ」
- 六二三 鏡山 中務
- 六一四 大國里 兼盛
- 六一五 吉田里 「能宣集Ⅲ」
- 六一六 泉河 「能宣集Ⅲ」
- 六一七 松が崎 「能宣集Ⅲ」

まず気づくのは、作者表記と家集との齟齬である。五九九は作者表記がなされていないが、勅撰集の通例としては、遡って最後に表記されている作者がそれであるから、この場合の作者は能宣ということとなる。ところが、この歌は兼盛集に収められている。六〇〇はよみ人しらずとあるが、これは能宣集に収められている。六〇二もよみ人しらずであるが、これは元輔集に収められている。六〇五もよみ人しらずであるが、これは家集には見られず、『詠歌』に元輔詠として載る。六〇七は元輔とあるが、これは能宣集に入っている。六〇八は兼盛とあるが、元輔集に入っている。六一五・六一七の作者表記はないが、勅撰集の通例からして、これらの作者は兼盛ということになる。しかし、三首とも能宣集に入っている。実に九例もの齟齬があるのである。

このうちには、拾遺集の本文に問題があるのではないかと疑われる例がある。現存する同集の伝本のほとんどは定家本であり、前掲の新日本古典文学大系本を含めて、現在一般に読まれているのも同系統の本であるが、これ以外に、堀河本や北野本といった異本もわずかながら伝存している。定家本と北野本の作者表記を比較すると、次の三点に違いがある。<sup>(18)</sup>

六〇七 定家本＝清原元輔、北野本＝作者表記なし

六〇八 定家本＝兼盛、北野本＝元輔

六一五 定家本＝作者表記なし、北野本＝能宣

北野本によれば、六〇七は作者表記がないから、六〇六の能宣と同じ作者ということになる。したがって、能宣集に入っていることとの齟齬はなくなる。六〇八は、北野本によれば元輔の歌であるから、元輔集に入っていることとの齟齬がなくなる。六一五は、定家本では作者表記がないから、六一四と同じく兼盛の作ということになっているが、北野本は能宣と表記されており、これに従えば、家集との齟齬がなくなる。六一六・六一七は作者表記がないから、

六一五と同じく能宣の作となり、これも家集との齟齬がなくなる。以上のように、この五首に関しては、北野本の本文であれば、すべて家集との齟齬が解消するのである。

しかし、残る四首、五九九・六〇〇・六〇二・六〇五に関しては、拾遺集の本文の問題という観点から家集との齟齬を説明することはできない。これは、拾遺集の編纂に関わる問題と考えるべきであろう。

ここで注目しておきたいのは、家集との齟齬が見られる四首がすべて安和元年の冷泉天皇の大嘗会の歌だということである。同じ大嘗会和歌ではあるが、冷泉天皇の分と円融天皇の分は分けて考える必要があると思われる。

まず、冷泉天皇の分から検討する。

冷泉天皇時の大嘗会和歌十一首はどこから採録されたのだろうか。十一首のうち六〇五（よみ人しらず）以外の十首は三名の作者の家集にも収められているから、それだけを見るならば、これら十首は各家集から採られたかのように思われる。しかし、六〇〇・六〇二が「よみ人しらず」とされているのを見れば、それはあり得ない。家集から採りながら、誰の作はわからないということは考えられないし、この場合、意図的に作者不明とする事情も想定できない。拾遺集撰者にとって、それらが誰の歌かわからなかったから「よみ人しらず」とせざるを得なかったと考えるのが自然である。

では、安和元年の冷泉天皇の大嘗会に詠進されたことは明らかであるにもかかわらず、その作者が分からない歌というのは、どのような形で存在したのか。前述のように、実際の大嘗会の場において奏された稻舂歌・神歌・風俗歌は作者名が示されていなかったと推測されるから、それである可能性がまず考えられる。しかし、それはあり得ない。前述のとおり、『詠歌』所載の十首が大嘗会において用いられた歌であるが、拾遺集に採録されている歌でそれと一致するのは五首（五九九・六〇〇・六〇一・六〇五・六〇七）に過ぎないからである。残る六首（五九八・六〇二・六〇三・

六〇四・六〇六・六〇八）は、それに含まれていない。すなわち、これら十一首は、三名が詠進した歌約三十首の中から選ばれていると見なければならぬのである。

ここでもう一度、歌人が歌を詠進するところから、その歌が歌謡に作られるまでの経緯を想起したい。まず、作者として選ばれた三名がそれぞれ斎国の具体的な地名を選び、各自十首程度の歌を詠作する。次に、それを行事に提出する。行事の手元には計三十首ほどの歌が集められることになる。ここで、風俗歌八首と稻舂歌・神楽歌（神歌）各一首が選ばれ、風俗歌は楽所に、稻舂歌と神楽歌は「下」に送られる。八首が一紙に、二首が一紙に記されたが、この時、選ばれた一首一首に作者名が記されていた可能性は低い。最終的には大嘗会の儀式の中で歌謡として奏されるのであるから、楽所等に送られる歌に作者名が記されたとは考えにくい。

このように想定したとき、三名の作者の歌がすべて揃うのは行事の許だけであることが明らかとなる。したがって、拾遺集所収歌は、行事の許に提出された約三十首の中から採録されたと考えざるを得ない。しかし、そのうちの三首は「よみ人しらず」とされ、実際の作者と異なる作者名が記されている例もある。これは、行事の手元にあった約三十首の歌を見た時、拾遺集撰者には、それぞれの歌が誰の作かはわからなかったことを意味していると思われる。作者名が分からなかった事情については、様々な可能性が考えられる。たとえば、そもそも三名の歌人が提出した歌に署名がなされていなかったのかもしれない。第三節において述べたように、元輔は冷泉天皇の大嘗会に際して悠紀・主基両方の歌を詠進したが、悠紀国の近江と主基国の播磨の地名だけを差し替えて、まったく同内容の歌を詠んでいる。この例は、大嘗会和歌において個性などというものは求められていなかったことを示していると思われる、そうだとすると、詠進する歌に作者名は記されないということも十分ありえよう。正しい作者名が記されている例があるのは、拾遺集撰者が何らかの事情で、たまたまそれを知ることができたということであろうか。ただし、これは憶

測に過ぎず、具体的な事情については不明とせざるを得ない。

冷泉天皇の分と比べると、円融天皇分の九首と家集との関係は単純である。作者表記が「能宣」とされている六〇九・六一一・六一二・六一五・六一七の六首は、すべて能宣集にも収められている。<sup>(19)</sup>したがって、一応これらは能宣集から採られたと見てよいと思われる。しかし、よく考えてみると、冷泉天皇の分は能宣集から採られてはいないのに、円融天皇の分だけが能宣集から採られたというのは不自然である。前述のように、能宣集の現存伝本には、冷泉天皇の大嘗会和歌と円融天皇のそれとが区別できる本とできない形態の本があり、また、それらとは異なる、『詠歌』が用いた形態の本の存在も想定されるが、いずれも両天皇の大嘗会和歌を一連のものとして収めていることに違いはない。<sup>(20)</sup>そのような家集から、円融天皇の分は採りながら、冷泉天皇の分は採らなかつたというのは考えにくい。そうすると、円融天皇の分も、冷泉天皇の場合と同じように、大嘗会の行事の許にあつた歌から採られたのではないかと思われる。そして、拾遺集の作者表記と家集との間に齟齬がないことからすると、この場合は、詠進された歌に作者名が残されていたと考えられる。

残る六一〇（兼盛）・六一三（中務）・六一四（兼盛）については、同一歌を収める他資料がないので、採録事情を推定するのは困難であるが、能宣と同じように考えて特に問題はないと思われる。おそらく、能宣・兼盛・中務の三人が提出した歌は、作者名が記されたまま残り、拾遺集撰者の手に渡つたものと推定される。

以上見てきたように、拾遺集に収められている冷泉天皇と円融天皇の大嘗会和歌は、いずれもそれぞれの大嘗会の際に詠進され、行事の許に残されていた歌の中から選ばれたものと考えられる。

## 結 び

安和元年の冷泉天皇の大嘗会の悠紀方作者は元輔・能宣・兼盛の三名であり、それぞれが十首程度の歌を大嘗会の行事に提出した。行事は、それら三十首程度の中から、風俗歌八首と稻舂歌・神歌各一首を選び、前者は楽所に、後者は「下」に下した。それらはいずれも大嘗会の場で歌謡として奏された。一方、詠進者は自分の手元にも歌を残し、後に家集にまとめた。主基方については資料が残っておらず、詳細は不明であるが、元輔はその作者の一人でもあった。『詠歌』の冷泉天皇分には、当初、大嘗会で奏された十首が採録されたが、後に、後朱雀天皇時の大嘗会屏風歌の四首と、冷泉天皇時に詠進された兼盛詠の十首が補入された。

天禄元年の円融天皇の大嘗会の時の悠紀方作者は能宣・兼盛・中務で、冷泉天皇時と同様に詠進し、歌謡として奏されたと推測される。この時の主基方についても資料が乏しく詳細は不明であるが、能宣は主基方の作者も兼ねたと見られる。

『詠歌』の円融天皇分に収められているのは、実際に大嘗会において奏された十首ではなく、能宣集から採録された十六首である。能宣は冷泉・円融両天皇の大嘗会に悠紀方の歌としてそれぞれ十首程度を詠進しており、それらは家集に収められているが、伝本によっては両大嘗会和歌を区別しないで載せている本があり、その形態の家集から、冷泉天皇時の大嘗会和歌であることが明らかな四首を除いたすべての歌を採録している。

『詠歌』の三条天皇以前の記事について、従来、実際に詠進された歌の形式を反映したものであるとする見方があったが、そうではなく、それは、実際のあり方を反映している記事と、後に補入した記事とが混在したものである。

拾遺集・卷第十「神楽歌」に載せる二人の天皇の大嘗会和歌は、大嘗会において楽として制作され、奏されたものではない。また、作者表記が実際と異なっていたり、「よみ人しらず」とする歌があったりするから、詠進者の家集から採ったものでないことも明らかである。これらは、大嘗会催行の責任者の許に提出された三人の詠進歌約三十首の中から選ばれた歌であると考えられる。

拾遺集の大嘗会和歌については、「神楽歌」という集名と大嘗会和歌との関係、二人の天皇の大嘗会和歌だけを二十首も採録した撰者の意図等、解明すべき問題は少なくないが、本稿ではそれらに言及することはできなかった。本稿において明らかにし得たのは、拾遺集所収の大嘗会和歌が具体的にどのような歌であったのか、そして、それがどのようにして拾遺集に採録されたのかということとどまる。ただし、これらは、拾遺集の大嘗会和歌全般の問題を考察する上で、まず明らかにしておくべきことであつたと考ええる。

## 注

- 1 金葉集の冬歌（二八七）、詞花集の雑下（三八三・三八四）、新勅撰集の雑歌四（二三〇四）という例外がある。
- 2 二六五番歌。詞書には「仁和御時、大嘗会の歌」とあり、歌は「蒲生野の玉の緒山に住む鶴の千とせは君が御代の数也」とある。しかし、仁和御時、すなわち光孝天皇の大嘗祭の悠紀は伊勢、主基は備前であり（三代実録）、「蒲生野」は近江国の地名なので、不審。以下、本稿においては、この賀所収歌には触れない。

- 3 八木意知男『大嘗会和歌の世界』（皇學館大學出版部 昭和六二）序章「大嘗会和歌について」、飯島一彦「悠紀主基風俗歌の変容」（『古代歌謡の終焉と変容』おうふう 平成一九）、中本真人「大嘗会和歌の神楽歌と清暑堂御神楽の変容」（『芸文研究』

一〇九— 平成二七・二二）等。

- 4 前掲八木著、藤岡忠美ほか『袋草紙考証 歌学篇』（和泉書院 昭和五八）参照。
- 5 「大嘗会屏風歌の性格をめぐって」（『国語と国文学』五五卷四号 昭和五三・四）。
- 6 本書の書名は、最初に全文が翻刻された『神道大系 文学編三 神道唱歌』（平成元）には「大嘗会悠紀主基詠歌」と、『新編国歌大観 第十卷』（平成四）には「大嘗会悠紀主基和歌」となっているが、両者の底本である書陵部蔵本の外題には「大嘗会悠紀主基詠歌（自承和至寛延）」とあるので、本稿においては「大嘗会悠紀主基詠歌」と記す。以下、同書の引用は神道大系本によるが、字体は通行のものに統一した。歌番号は新編国歌大観番号を用いる。
- 7 花山・一条両天皇時の歌人数は、『大嘗会悠紀主基詠歌』の第二部「大嘗会和歌作者例」による。
- 8 前記注3の飯島・中本論文等。
- 9 主基方については、残存する歌が少なく、詠進事情不明。
- 10 元輔・兼盛・能宣各集の伝本の分類は『新編私家集大成』（古典ライブラリー）の解題による。以下、引用・歌番号も同書による。
- 11 「踐祚大嘗祭儀上」の「かつ春きかつ歌え」とある記事の割注に「歌詞はその時これを制れ」とある。引用は、皇學館大学神道研究所編『訓讀儀式 踐祚大嘗祭儀』（思文閣出版 平成二四）による。
- 12 『大嘗会悠紀主基詠歌』一七四Ⅱ『兼盛集』Ⅰ類本一一五（歌番号は以下同）、一七五Ⅱ一一三、一七六Ⅱ一一四、一七八Ⅱ一一一、一七九Ⅱ一一〇、一八一Ⅱ一〇九、一八二Ⅱ一〇五、一八三Ⅱ一〇六、一八四Ⅱ一〇七、一八五Ⅱ一〇八。
- 13 新日本古典文学大系二九 藤岡忠美校注『袋草紙』（岩波書店 平成七）による。
- 14 『小右記』長和元年八月十四日条によれば、安和度の悠紀の行事は右少弁菅原輔正である。
- 15 「神歌」と「神楽歌」については、『大嘗会悠紀主基詠歌』によれば、村上天皇時は「風俗神歌」（主基）、冷泉天皇時は「神

拾遺和歌集・卷第十「神楽歌」の大嘗会和歌について（深津）



歌」(悠紀)、三条天皇時は「神歌」(悠紀)・「神楽歌」(主基)、後一条天皇時は「神楽歌」(悠紀)・「神歌」(主基)、後朱雀天皇時は「神歌」(悠紀)・「神歌」(主基)、後冷泉天皇時は「神楽歌」(悠紀)・「神歌」(主基)、後三条天皇時「神楽歌」(悠紀)・「神楽歌」(主基)と、後三条天皇以前は区別されている。後三条天皇以後は、すべて「神楽歌」となる。後三条天皇以前、両者の間に区別が存在していたことは、中本(注1論文)に指摘がある。また、その違いについては、米山敬子「神歌」と「御神楽」と(『日本歌謡研究』四〇号 平成一二・一二)において考察されており、それによれば、「御神楽」の一部に「神歌」が含まれるという。米山の指摘や後三条天皇以後すべて「神楽歌」に統一されることを考えると、「神歌」も清曇堂御神楽において奏されたと見てよからう。

- 16 主基方の歌として載る五首のうち、二〇三・二〇四は能宣集所収、二〇五・二〇六は重之集所収で、それらの家集から採られたものと思われる。二〇七は金葉集から採ったと思われる。これらによれば、重之は主基方の歌人であったと見られるが、重之の大嘗会和歌は拾遺集に一首も入集しなかった。その詳しい事情は不明。

- 17 小町谷照彦校注『拾遺和歌集』(岩波書店 平成二)。

- 18 片桐洋一『拾遺和歌集の研究 校本編 伝本研究編』(大学堂書店 昭和四五)による。

- 19 六首のうち、六〇九のみは主基方の歌である。

- 20 能宣集のI類本は、拾遺集撰者と目されている花山院に献上された系統の本である。拾遺集撰者がこの能宣集を資料源としなかった事情は不明。